

# 子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

## 論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Pet ownership during pregnancy and mothers' mental health conditions up to 1 year postpartum: A nationwide birth cohort—the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

妊娠中のペット飼育と産後1年までの母親の精神健康:エコチル調査

ユニットセンター(UC)等名: 富山ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Social Science & Medicine

年: 2022 DOI: 10.1016/j.socscimed.2022.115216

筆頭著者名: 松村 健太

所属 UC 名: 富山ユニットセンター

目的:

ペット(犬・猫)飼育と精神健康の関係は様々な集団を対象として調査されている。しかし、精神健康の脆弱期間である出産前後の母親を対象とする研究はほとんど存在しない。そこで本研究では、妊娠中のペット飼育と、妊娠中から産後1年までの母親の精神健康との関係を調べた。

方法:

エコチル調査に参加している80,814人の母親を対象とした。ばく露は妊娠中のペット飼育(なし、犬のみ、猫のみ、犬猫双方)、アウトカムは妊娠中から産後1年までの精神健康(心理的苦痛および抑うつ症状の程度)とした。交絡因子として、年齢、社会経済要因、精神疾患既往歴など、17変数を考慮した。統計的解析では、多変量ロジスティック回帰分析および一般化線型モデルを用い、調整済みオッズ比を算出した。

結果:

解析の結果、妊娠中に犬も猫も飼っていない場合と比較して、犬の飼育は、産後1ヵ月および6ヵ月における抑うつ症状の低減、および産後12ヵ月における心理的苦痛の低減と関連していた。対照的に、猫の飼育は、産後6ヵ月における抑うつ症状の増大、および妊娠中における心理的苦痛の増大と関連していた。犬と猫双方の飼育は、妊娠中における心理的苦痛の増大と関連していたが、その他の時期においては、犬も猫も飼っていない場合と同程度であった。

考察(研究の限界を含める):

本研究の結果より、犬の飼育は精神健康に対する保護因子である一方で、猫の飼育は精神健康に対するリスク因子であることが分かった。関連の程度は弱かったものの、保護因子かリスク因子かという関連の方向性については、調査時期を問わず一貫していた。これらの結果は、飼っているペットの種類(犬か猫か)が、周産期および産後の母親のメンタルヘルス維持において異なる役割を果たしている可能性を示唆するものである。本研究の限界としては、観察研究であるため因果関係を扱っていないこと、妊娠中の1時点ではしかペットの飼育状況を聞いていないこと、犬や猫の種類や頭数を聞いていないことなどである。

結論:

犬の飼育は精神健康に対する保護因子である一方で、猫の飼育は精神健康に対するリスク因子であることが分かった。この結果より、飼っているペットの種類(犬か猫か)が、周産期および産後の母親のメンタルヘルス維持において異なる役割を果たしている可能性が示唆された。